関西学院大学リポジトリ
Kwansei Gakuin University Repository

IL est un N 型コピュラ文が許容される要因： C'est un N と IL est o N との比較

著者	吉田 汐里
雑誌名	人文論究
巻	72
号	2
ページ	65-85
発行年	2022-09-20
URL	http://hdl.handle.net/10236/00030451

« IL est un N » 型コピュラ文が許容される要因

―― « C'est un N » と « IL est ø N » との比較――

吉　田　汐　里

は　じ　め　に

「彼は言語学者です」をフランス語で表すと，（1）a. と（2）b. のみが許容される。

（1）a. Il est linguiste.

　　b. *Il est un linguiste.（東郷，1988）

（2）a. *C'est linguiste.

　　b. C'est un linguiste.（*Ibid.*）

東郷（1988）によると，（1），（2）の IL / CE の選択にはコピュラ文のタイプが関わり，記述文では IL が，同定文では CE が選択される。（1）a. は Il の属性を表す記述文で，（2）b. は同定文である。東郷（1988）は，（1）b. の容認度が低いのは，「指示対象の identité が確立していることを前提とする IL を用いながら，属詞 un linguiste であらためて identité を述べている」からだと説明する。しかし，藤田（1992）によれば，（3），（4），（5）は容認度が高く，（6），（7），（8）は問題なく成立する。

（3）（?）Nathalie, elle est une artiste[1].（藤田，1992）

---

(1) 藤田（1992）は例文の容認度を，フランス人インフォーマントへの調査に基づいて判定し，（3）のように強勢を置いたり，（4）のようにある種の副詞を補ったりすると，容認度がかなり高くなると述べる。

（4）（?）Elle est une mère avant tout.（*Ibid.*）

（5）Il n'est qu'un enfant.（*Ibid.*）

（6）On dit qu'il est un écrivain.（*Ibid.*）

（7）Isabelle pense qu'il est un écrivain.（*Ibid.*）

（8）Pour Olivier, il est un écrivain.（*Ibid.*）

藤田は（6），（7），（8）について，すでに同定された IL を écrivain に属すものとして分類しなおしており，何らかの特定の状況で成立する分類であるため，容認度が上がるのだと説明する。では，（3），（4），（5）の IL est un N 型文はどのような条件のもとで容認されるのだろうか。

本稿では，1. でコピュラ文の 3 つのタイプを紹介し，それぞれのタイプと名詞句の持つ「役割」と「値」の側面との関係を検証する。2. では，属詞位置に un N が現れる条件について述べる。3. では，Fauconnier（1984）のメンタル・スペース理論を用いて IL est un N 型文について分析する。4. では先行研究における問題点を指摘し，5. では，おもに小説からの実例を用いて仮説の検証を行う。なお，本稿では，IL が主語代名詞 il, ils, elle, elles を表すこととする。

1. IL / CE の選択

1.1. コピュラ文の 3 つのタイプ

コピュラ文のタイプについて，東郷（1988）は記述文と同定文の 2 種類のみを区別していたが，東郷（2011）では記述文・同定文・指定文の 3 つに分類している。

まず，第一のタイプである記述文は，主語の性質・身分・職業などを述べる文である。Paul est grand. の主語 Paul は特定の人を指し，指示的である。記述文では，属詞が国籍や職業を表す名詞のときは無冠詞となり，形容詞化する。記述文の主語を代名詞にすると，il / elle となる。（1）a. Il est linguiste. がこのタイプの文である。

第二のタイプは同定文である。これは，正体のわからない人や物の正体を尋ねる疑問文に対する答になる。(9) の Cet homme は特定の人を指し，指示的ではあるが，その人が何者かはわからない。答えの文の属詞 un linguiste でその正体が明かされる。同定文の主語を代名詞にすると，(9)' のように ce が用いられる。

(9) Qui est cet homme ? — Cet homme est un linguiste.（東郷，2011）

(9)' Qui est-ce ? — C'est un linguiste.（*Ibid.*）

第三のタイプの文は指定文と呼ばれる。

(10) Qui est le capitaine de ce bateau ?

— Le capitaine de ce bateau est {M. Durand / cet homme-là}.（*Ibid.*）

(10)' Qui est le capitaine de ce bateau ?

— C'est {M. Durand / cet homme-là}.（*Ibid.*）

(10) の主語 le capitaine de ce bateau は非指示的である。東郷は，この非指示的名詞句を中身の入っていない空の箱に喩える。(10) の疑問文はこの箱の中身を尋ね，答はその中身を与える。指定文の主語を代名詞に置き換えた場合，ce が選択される。

1.2. 名詞句の「役割」と「値」

東郷（1993）は Fauconnier（1984）のメンタル・スペース理論を導入し，IL と CE の指示対象について分析する。Fauconnier によると，メンタル・スペースとは，「言語構造とは別の構成物であるが，言語表現が提供する指針に基づいて任意の談話において設定されるもの」である。例えば (11) では，En ce temps-là がメンタル・スペースを導入する表現である。

(11) a. En ce temps-là, son mari, il était musicien.（東郷，1993）

b. En ce temps-là, son mari, c'était un musicien.（*Ibid.*）

(11) a. は，「彼女の夫はそのころ音楽家だったが，今は別の仕事をしている」，(11) b. は，「そのころ彼女の夫であった人は音楽家だった。しかし今

の夫はそうではない」と解釈できる。メンタル・スペース理論によると，名詞句には rôle（役割）と valeur（値）の 2 つの側面があるという。名詞句は本来役割関数であり，時間や場所などのパラメータを定めると，個体である値を取る。（11）a. では，son mari は彼女の夫という一人の男すなわち個体を指し，（11）b. では「彼女の夫」という役割を当時満たしていた人を指す。彼女と結婚すれば誰でもその役割を満たせるため，個体（値）を指してはいない。

（12）Le vice-président des États-Unis, c'est un crétin.（*Ibid.*）

東郷（1993）によると，le vice-président des États-Unis を役割解釈とした場合，（12）は「アメリカの副大統領は誰がなろうと馬鹿者になると決まっている」の意味になる。一方，値解釈とし，時間のパラメータを現在に設定すると，Dan Quayle, c'est un crétin. と同値の文になる(2)。正体のわかっている名詞句については，値解釈の名詞句を指す IL を用いた記述文となるが，（12）は役割解釈の名詞句を指す CE を用いた同定文となっている。これについて東郷は，アメリカの副大統領が誰かは了解済みであるが，それがどのような人間かということはいつでも問題になりうるからだと説明する。その場合，Dan Quayle が un crétin に属する人間だと再同定される。以上から東郷は，「IL は値解釈の名詞句をさし，CE は役割解釈の名詞句をさすか，話者があらたな観点からその役割解釈を問題にする名詞句をさす」という原則を提示する。

1.3　IL / CE の指示対象

1.3.1　人称代名詞の IL と指示代名詞の CE

東郷（2015）は，IL と CE の選択には，話し手にとっての指示対象の認知状態と，話し手が指示対象について何を述べたいか，ということが関わると主張する。

---

(2)　ここでいう現在のパラメータとは，東郷（1993）の論文が書かれた当時のことであるため，時間のパラメータが 1992 年に設定されている。

（13）a. Je comprends mal ton histoire. Elle est curieuse.（東郷，1988）

b. Je comprends mal ton histoire. C'est curieux.（*Ibid.*）

（14）La crème la plus chère du monde. Elle est un miracle de la technologie. Elle est une folie.（東郷，1993）

（13）a. の elle は，ton histoire という特定の名詞句を指し，（13）b. の ce は「きみの話をうまく理解できない」という意味内容を指す。（14）では，記述文の属詞位置に不定冠詞つきの名詞句が現れる。東郷（1993）によると，不定冠詞のついた名詞句はふつう，同定文の属詞として用いられるが，記述文の主語の性格づけに用いられる場合，ある対象に修飾語がついていたり，その対象について文を連ねて述べていたりすると IL による受け直しの容認度が高くなる。

（15）a. Jean, il est malin.（東郷，1988）

b. *Jean, c'est malin.（*Ibid.*）

（16）a. *Un homme honnête, il est rare.（*Ibid.*）

b. Un homme honnête, c'est rare.（*Ibid.*）

（15）の属詞は形容詞であり，記述文であるから IL が選択される。（16）でも IL が選択されそうであるが，IL が用いられた（16）a. は非文であり，（16）b. の CE はクラスを指す総称名詞句を受けている。（16）b. は記述文であるが，指示内容が拡張されると CE を用いた指示が可能になる。東郷によると，CE は指示代名詞であり，語用論的コントロールを受ける。発話の現場にあるモノを直示的に指し，カテゴリー化を前提としていない。一方，IL は人称代名詞であり，言語的コントロールを受ける。コトバを指す代名詞であるため，指示対象のカテゴリー化を前提とする。

（17）Un homme honnête, {?? c'est / il est} heureux.（＝une personne heureuse）（小田，1999）

小田（1999）は，（16）の rare が un homme honnête の存在全体についての記述であるのに対し，（17）の heureux は un homme honnête の内的性質についての記述であると述べる。前者は拡張された指示を行う CE が選択さ

れ，後者は指示対象そのものを捉える IL が選択される。小田によると，総称名詞であっても拡張的視点から即物的視点に移行すると，IL による受け直しが可能になる。

（18）a. Un homme qui n'est aimé de personne, c'est malheureux.（*Ibid.*）

b. Un homme qui n'est aimé de personne, il est malheureux.（*Ibid.*）

（19）a. Le chat, il est méfiant.（*Ibid.*）

b. Le chat, il est méfiant, et le chien, il est confiant.（*Ibid.*）

（18）a. は「誰にも愛されない人がいるなんて不幸なことだ」となり，c'est malheureux が話し手の視点からの述定と捉えられる。（18）b. は「誰からも愛されない人は不幸だ」となり，il est malheureux が指示対象の視点からの述定と捉えられる。話者または他人の視点から見た主観的述定は CE，話者の視点を排除した，指示対象の視点からの述定は IL で受け直されることがある。また，関係節によって修飾されると，指示対象の輪郭線が明確になり，IL による受け直しが可能になる。小田は，（19）b. が示すように，対照的な要素を導入することによっても指示対象の輪郭が明確になり，総称名詞でも IL を用いることができると述べる。条件づけ・範囲の限定・対照要素の導入により，指示対象の輪郭線が際立ち，総称名詞句を人称代名詞で受けることが可能になるのである。

1.3.2. 十全な名詞句

井元（1991）によれば，「十全な名詞句」とは，「特定のスペースの中に置かれた時，性・数の分類化が可能な特性を持ち，その特性が，話者と聞き手の間に共通の了解が成立する「値」を自動的に与えることになる名詞句」である。性・数の分類化が可能な特性とは，概ね役割に相当する。

（20）Paul veut voir le directeur.（井元，1991）

（20）には，親スペース「話者の現実 R」と，子スペース「ポールの観念の世

界 M」が存在する。le directeur を役割解釈とすると，ポールが局長本人を知っている必要はない。話者は聞き手との間で，「ポールの観念世界に存在する directeur の地位にいる人物」という共通の了解を成立させる。M 内では，le directeur が「十全な名詞句」として機能する。また，値解釈の場合，この値は M 内で directeur という特性を持っていなくても，R における値の役割が示される。このとき，le directeur は R 内で「十全な名詞句」として存在する。

1.3.3. 不完全な名詞句

井元によると，「不完全な名詞句」とは，「当該のスペース内で「役割」を持ちながら，その「役割」が「値」を自動的に与えることのできない名詞句，あるいは「値」のみであるか，「役割」を備えてはいても，その「役割」が性・数の分類化不可能な特性である名詞句」であり，CE は「不完全な名詞句」として働く。井元は，CE が「不完全な名詞句」となる 3 つの場合を検証する。

まず，①「「役割」が当該のスペースで自動的に「値」を与えることを話者が拒否する場合」である。

（21）Qui est Chomsky ? — C’est un linguiste.（井元，1991）

（21）の CE は役割概念のみを受け，その概念に語用論的に対応するものとして，間接的に値を示す。その値に un linguiste という役割が属詞によって与えられる。

次に，②「「役割」が性・数の分類不可能な特性である場合」である。（22）a. の IL は，マルクス個人を，（22）b. の CE は「マルクス主義」などを指す。性・数の分類化が不可能な「先行概念マルクスの語用論的対応物」には CE による指示が行われると井元は述べる。

（22）a. Marx, il est fini.（三藤，1989）

b. Marx, c’est fini.（*Ibid.*）

そして，③「「値」のみが指示対象になる場合」である。

（23）Ça coûte combien une auto comme ça ?

（Duras，in 朝倉，1981 cité par 井元，1991）

最初の ça は後方の une auto comme ça を指す。une auto comme ça の ça は，目の前の車を直示的に指す。この車は値であり，l'auto という役割を持つ先行詞として提示されているのではない。指示対象の性・数を問題にはしていないため，elle で受けることはできない。

したがって，IL は話し手と聞き手との間で指示対象が確立しているときに用いられ，十全な名詞句として存在する要素を指す。CE は指示対象が確立されていないときや，名詞そのものを指さないときに用いられ，不完全な名詞句として存在する要素を指す。

2. 属詞位置に現れる un N

2.1. 性質記述機能と役割記述機能

長沼（2003）は，コピュラ文の属詞位置に現れる名詞句について，性質記述機能と役割記述機能の 2 つを区別し，（24）の Riegel（1985）の例を引用する。

（24）Pierre est professeur.（Riegel，1985 cité par 長沼，2003）

（24）について，Riegel（1985）は「ピエールは教師らしい」という第一のタイプの解釈と，「ピエールは教師である」という第二のタイプの解釈があると述べる。長沼は，第一のタイプの場合，professeur には，Pierre の「教師らしさ」を記述する性質記述機能が働き，第二のタイプの場合，「教師であること」，つまり教師という役割を表す役割記述機能が働くと述べる。

（25）a. Je suis femme.（長沼，2003）

b. Je suis une femme.（*Ibid.*）

長沼（2003）は（25）について，Kupferman（1991）の指摘を適用し，社会的・文化的区別が関わっている場合に属詞位置の名詞が無冠詞で現れると述べる。つまり役割記述機能が働くには，社会的・文化的分類の操作が働き，分類すべきクラスがあらかじめ設定されていなくてはならないということである。

長沼によれば，（25）a. では性別に基づくクラス分けが示唆され，（25）b. では実体として女性であること，生物学的に女性であることが示される。

しかし，（24）は多くの場合，単に「ピエールは教師である」と解釈される。professeur が副詞 très をともなって確実に形容詞だと捉えられる « Pierre est *très* professeur. » は「ピエールは教師らしい」と解釈されるが，（24）がそのまま「ピエールは教師らしい」と解釈されることは稀である。これは（25）a. についても同様である。また，長沼は「社会的・文化的区別」という語を用いて説明するが，「社会的・文化的区別」についての厳密な定義がなく，属詞位置に名詞が無冠詞で現れる条件がうまく説明されているとは思えない。

2.2. N が修飾語句をともなう IL est un N 型文

長沼（2012）は Jeunot（1983）を挙げ，N が修飾されるときの IL est un N 型文について分析する。Jeunot は，形容詞や関係節によって示唆的特性が付与されると，属詞位置に un N の形で現れると述べる。

（26）Je suis un bon médecin.（Jeunot, 1983）

（27）Je suis un médecin qui ne brutalise pas ses patients.（*Ibid.*）

藤田（1985）は（26），（27）について，je が bon médecin の一人，médecin qui ne brutalise pas ses patients の一人であることを意味するのではないと指摘する。médecin という概念が修飾されて下位分類を受け，je は bon や qui 以下の特性によって指定されるタイプの médecin であることを表す。

しかし，Jeunot は，（26），（27）の主語を IL にしたとき，示唆的特性が付与されただけでは適切な文とはならないと指摘する。

（28）a. Il est médecin, c’est entendu ; mais est-il un médecin, un vrai comme on dit ?（*Ibid.*）

b. Est-il un grand médecin ?（*Ibid.*）

c. Est-il un mauvais médecin ?（*Ibid.*）

（29）Je sais que Jean a commencé des études de médecine ; mais main-

tenant, est-il médecin ?（*Ibid.*）

Jeunot によると，疑問文の場合，IL est un N 型文が成立するための制約は少なくなる。(28) a. の vrai / pas vrai，(28) b. の grand / pas grand，(28) c. の mauvais / pas mauvais のような質的な価値への走査が起こるとき，IL と un が共起できると Jeunot は述べる。一方，(29) のように，être médecin / ne pas être médecin という記述の異なる価値への走査（parcours）が行われる場合には不定冠詞を導入できない。藤田（1985）は（29）について，il / médecin という関係が予め構築され，背景となる場合に IL と属詞位置の un が共起できると述べる。また長沼 (2012) は，藤田の考察を発展させ，« il est un bon médecin » という記述が可能となるには，« il est médecin » という前提が必要であると主張する。

3. メンタル・スペースと IL est un N 型文

3.1. ID 原則とスペース導入表現

Fauconnier（1984）は，メンタル・スペース理論において重要な役割を果たす ID（同定）原則を提案する。ID 原則とは，「二つの対象（最も一般的な意味で）a と b とが語用論的関数 F（b＝F（a））によって結合されているならば，a の記述 d_a を用いて a の対応物 b を同定できる」というものである。例えば，a がプラトン，b がプラトンの本だとすると，（30）は（31）を意味することができる。

（30）Plato is on the top shelf.（Fauconnier, 1984）

（31）The books by Plato are on the top of shelf.（*Ibid.*）

b（プラトンの本）は，語用論関数 F によって a（プラトン）に結合されており，Plato という記述でも The books by Plato を指すことができる。

Fauconnier によると，スペース導入表現は，新しいスペースの設定や談話においてすでに導入されているスペースへの言及を行う表現である。スペース導入表現には，in Len’s picture や in 1929 などの前置詞句，probably や

theoretically などの副詞，if A then…などの命題結合子，Max believes…や Mary hopes などの主語と動詞を結合したものがある。スペース導入表現は節とともに現れ，節は典型的にはスペースの要素間に成り立つ関係を表す。

3.2. 複数スペース

メンタル・スペースという概念装置を用いることで，言語表現によって構築された，話し手と聞き手との間の心的空間において，言語表現が心的空間内に対応する要素をもち，要素間に成り立つ関係を明確に記述することができる。

（32）In Len's painting, the girl with blue eyes has green eyes.（*Ibid.*）

Fauconnier は（32）について，「青い目の女の子が，絵の中では緑の目をしている」と，「絵の中の女の子は青くかつ緑の目をしている」の 2 つの解釈があると述べる。前者では，the girl with blue eyes という記述が the girl with green eyes を同定する。後者では，the girl with green eyes という記述が the girl with green eyes を同定し，現実世界の the girl with blue eyes の記述であると見なす。このとき，In Len's painting が子スペース M を設定する。Fauconnier によれば，the girl with blue eyes は親スペースで「a は青い目をしており，かつ a は女の子である」が成り立つ要素 a を指す。a は M 内に対応する要素 a'を持ち，ID 原則により，M 内で「a'は緑の目をしている」が成り立つ。

複数スペースが関わる文の解釈では，（33）の ID 原則が適用される。

（33）コネクター F で結合される二つのスペース M と M'，および M 内に要素 x を導入するかそれを指し示す名詞句 NP があるとすると，この時には，

a. M'内に x の対応物 x'（x' = F(x)）があるならば，NP は x'を同定することができる。

b. x の対応物が M'内にまだ確立されていないならば，NP は M'内に x' = F(x) となるような新しい要素 x'を設定し，同定することができる。（*Ibid.*）

3.3. 子スペースにおける分類

（6）On dit qu'il est un écrivain.（藤 田，1992），（7）Isabelle pense qu'il est un écrivain.（*Ibid.*），（8）Pour Olivier, il est un écrivain.（*Ibid.*）では，IL est un N 型文は問題なく成立する。これについて藤田（1992）は，作家であることがわかっている IL があらためて écrivain に分類されることを表すからだとする。

（34）Isabelle pense qu'il est un écrivain.（＝（7））

（34）には，親スペース（話者の現実）と，Isabelle pense が設定する子スペース（Isabelle の心的世界）がある。IL は現実世界の要素 a に対応し，un écrivain は Isabelle の心的世界の要素 w に対応する。要素 w は Isabelle の心的世界で écrivain クラスに分類される。Isabelle の心的世界で作家クラスに分類された要素 w は，現実世界の要素 a と，être によって対応関係に置かれる。

藤田（1992）は，un N が表す分類は親スペースの要素 a の分類ではなく，子スペースにおける要素 w の分類であり，それが IL est un N 型文の成立要因であるとする。（34）は子スペースにおいて，要素 w が un écrivain に分類されることを示す。藤田によると，親スペースにおける子スペースの評価は，スペース導入表現に左右されると述べる。（35）は N の属性が話者の現実でも認められる場合，（36）は認められない場合である。しかし，（37）は，親スペースにおいて，子スペースでの分類が否認されることを含意するため容認されない。

（35）Isabelle pense qu'il est un écrivain. En effet, ses phrases ne sont pas celles d'un journaliste.（藤田，1992）

（36）Pour moi, ce n'est qu'un barbouilleur de papier, mais Isabelle pense qu'il est un écrivain.（*Ibid.*）

（37）*Isabelle croit qu'il est un écrivain. En effet, ses phrases ne sont pas celles d'un journaliste.（*Ibid.*）

動詞 croire は Isabelle の考えている分類が間違っていることを含意する。

「イザベルは彼を作家だと思っている（が私（＝話者）はそうだとは思っていない）」という意味になり，Isabelle が IL に対して行う分類を，話者が否認する解釈が起こるのである。

3.4. スペース導入表現がないときの IL est un N 型文

（34）では，« Isabelle pense que… » によって Isabelle の心的世界の導入が明示されるが，明示的な表現がなくても（38），（39）は容認される。

（38）（?）Nathalie, elle est une artiste.（＝(3)）

（39）Sa mère est une femme ordinaire. Mais Nathalie, elle est une artiste.（*Ibid.*）

藤田によれば，（39）は母親との比較から，Nathalie が芸術家クラスの一員であることが強調されている。また，Pour moi, Nathalie, elle est une artiste. では，話者の主観から Nathalie を芸術家クラスに分類することが示されるが，（38）では，Nathalie の分類が話者の主観だけによらず，一般的に広く認められたものとして提示される。（4）（?）Elle est une mère avant tout. の avant tout といった表現を用いることでも，N への分類が確信をもって示される。

4. 問題提起と仮説

4.1. 問題提起

IL est un N 型文が許容される条件として，長沼（2012）は，IL est ø N が前提となっていることを挙げる。さらに，藤田（1992）は，複数スペースが想定でき，親スペースの要素 a に対応する子スペースの要素 w が N の表すクラスに分類されることを示すことを挙げる。また，スペース導入表現がなくても，IL の N の表すクラスへの分類が示されると IL est un N 型文は容認される。

さらに，西村（2015）は，（40），（41）について興味深い指摘をしている。

（40）J'appellerai ma fille Françoise. Et si c'est un garçon ? Ce sera une fille. Il y a toujours eu des filles dans la famille.（西村，2014）

（41）Nous élèverons cet enfant ensemble. Il sera notre enfant.（*Ibid.*）

西村は時制に注目し，「この子は私たちの子だ」は Cet enfant, c'est le nôtre（notre enfant）. であり，Cet enfant, il est le nôtre（notre enfant）. とは言えないとする。しかし，（41）のように，単純未来の Il sera notre enfant. は容認される。西村によれば，（41）で主語に IL が選択されるのは，「あなたと他の男との間にできた子を私たちの子にする」という，votre enfant から notre enfant へのアイデンティティの変化が示されているからである。このように変化を被る主体には，IL のみが許容されると西村は説明する。

（42）（…）Mais il ne pouvait le lui dire ; non parce qu'Anne était jalouse ou foncièrement vertueuse et intraitable sur ce sujet, mais parce qu'elle avait dû accepter de vivre avec lui sur les bases suivantes : que l'ère de la débauche facile était finie, qu'*il n'était plus un collégien, mais un homme* à qui elle confiait sa vie, et que par conséquent il avait à se tenir bien et non pas en pauvre homme, esclave de ses caprices.（Sagan, *Bonjour Tristesse,* p. 136）

（42）では，アンヌの考えを表す que 節に IL est un N 型文が埋め込まれている。ここでは，過去と現在という複数のスペースが想定され，時制の変化・時制のずれが IL est un N 型文を成立させると思われる。

（43）（リリアンヌは恋人のアルフォンスを捨てて，他の男と駆け落ちしようとしている）

Julie : Et Alphonse ? Qu'est-ce qu'il a dit ?

Liliane : Ben… il aura une surprise ce soir.

Julie : Il va être dans un état épouvantable.

Liliane : Il est toujours dans un état épouvantable. C'est un enfant capricieux, gâté… *Il ne sera jamais un homme.*

Julie : Il vous aime. Vous deviez vous marier.

（*La Nuit américaine,* film de François Truffaut）

（43）では，スペース導入表現なしで IL est un N 型文が用いられている。（42）と同様，現在と未来の 2 つのスペースによる時制のずれが，IL est un N 型文の成立を可能にすると考えられる。長沼（2012）は，IL と un が共起するためには，IL est un N に対し IL est ø N という前提が必要だとするが，ここでは il sera homme という前提があるとは思われない。

4.2. 仮説

藤田（1992）は，IL が親スペースの要素 a に対応し，a に対応する子スペースの要素 w が N の表すクラスに分類されるときに IL est un N 型文が成立するとする。つまり，複数スペースの想定がしにくい場合には，IL est un N 型文の容認度は低くなる。藤田の主張を発展させると，次のように説明できるだろう。

コピュラ文の主語位置の人称代名詞 IL は，アイデンティティが確立された指示対象を表す。一方，コピュラ文の属詞の un N は，指示対象を分類する働きをする。IL est un N 型文は，アイデンティティの確立した指示対象について，あらためて N という集合の要素として分類することを表す。Pour X（X によると）のようなスペース導入表現があると IL est un N 型文が容認されやすいのは，話者にとってすでに同定済みの主語 IL について X が異なる属性を与えることを述べるからである。つまり，主語 IL が同定されるスペースと属詞 un N が分類されるスペースとが異なり，それぞれ別のスペースで成立しているからである。動詞の時制が半過去形・複合過去形・単純未来形などのときに，IL est un N 型文が容認されやすくなるのも，アイデンティティの確立した指示対象 IL について，異なる時空間において分類をしなおすからである。

以上から，2 つの仮説を提示し，主に小説からの実例をもとに検証を行う。

仮説 1：Pour X のような明示的なスペース導入表現があり，複数スペースが想定されるとき，IL est un N 型文は容認されやすい。また，コピュラ文の

時制が（現在形ではなく）半過去形・複合過去形・単純未来形のとき，明示的なスペース導入表現がなくとも複数スペースが想定されると，IL est un N 型文が容認されやすい。

仮説 2：IL が，他のある要素と対比される文脈に置かれたとき，IL est un N 型文は容認されやすくなる。

5. 実例による仮説の検証

5.1. スペース導入表現がある例

まず，スペース導入表現があるときの IL est un N 型文を分析する。

（44）Ces contes, et vingt autres de même genre et d'une non moindre authenticité, intéressaient vivement Mme Pietranera ; le lendemain elle demandait des détails au comte Mosca, qu'elle plaisantait vivement. Elle le trouvait amusant et lui soutenait qu'au fond *il était un monstre* sans s'en douter.（Stendhal, *La Chartreuse de Parme*）

（44）では，Elle soutenait で Mme Pietranera の心的世界が導入される。その中で Mosca は un monstre に分類される。すでにアイデンティティの確立している Mosca に新たな分類を行うため，IL est un N 型文が許容される。

（42）について再度考察する。（42）では，IL は主人公セシルの父，レイモンを指す。アイデンティティの確立した指示対象について，レイモンがどのような人に分類されるかを問題としている。アンヌの心的世界ではレイモンが un homme に分類されることを表すため，IL est un N 型文が容認される。

5.2. スペース導入表現がない場合

スペース導入表現がない場合について，まずは時制に注目する。（45）では半過去，（46）では複合過去，（47）では単純未来の例を分析する。

（45）La vie avait beau paraître affreuse, elle devait être grande et

bonne, puisqu'on mettait à la vivre une volonté si tenace, dans le but, sans doute, de cette volonté même et du grand travail ignoré qu'elle accomplissait. Certes, *il était un savant, un clairvoyant,* il ne croyait pas à une humanité d'idylle vivant dans une nature de lait, il voyait au contraire les maux et les tares, les étalait, les fouillait, les cataloguait depuis trente ans（…）（Zola, *Le Docteur Pascal*）

半過去により過去のスペースが想定され，その時空間において IL が un savant, un clairvoyant に分類される。現在と過去の時制のずれが起こり，現在のスペースとは異なる分類を行うことを表すため，IL est un N 型文が容認される。

（46）Hermione : Mais avant, tu sais bien qu'il était avec trois ou quatre filles en même temps.

Esther : *Il a été un coureur,* je sais. Eh bien il ne le sera plus. Je me sens tout à fait capable de le faire changer. Je veux qu'il sache qu'il doit choisir entre moi et les autres. C'est tout ou rien.（*Les rendez-vous de Paris,* film d'Éric Rohmer）

Hermione の発話では，IL は同時に複数の女の子と付き合うような人であったことが示される。Esther は，IL が過去には un coureur であったが，今はそうではないと述べる。現在とずれのある過去のスペースにおいて，アイデンティティの確立した IL を分類しなおしているため，IL est un N 型文が許容される。

（47）— As-tu compris ce que nous disions ?

— Un peu. Pas trop.

— Oh ! Rien que des choses pour se reconnaître, pour se dire qu'on est de la même mitonnée. Ceux-là n'aiment guère parler en français, mais leur bébé, quand *il sera un homme,* peut-être

qu'il ignorera le patois. Ils veulent économiser pour qu'il fasse des études.（Sabatier, *Les Noisettes sauvages*）

（47）では，現在の leur bébé が，未来においては un homme（大人の男）になるという指示対象のアイデンティティの変化が見られる。同じ指示対象が未来スペースにおいては現在と異なる分類に属する。長沼（2012）が主張する，il sera un homme に対する il est homme という前提があるのではなく，現在とは異なるスペースを想定していることが IL est un N 型文の成立に関わると考えられる。未来スペースでは，IL に現在とは異なる分類が行われるため IL est un N 型文が容認されるのである。

先に挙げた（43）についてあらためて考察する。C'est un enfant capricieux, gâté…という発話では，主語に CE が用いられ，すでにアイデンティティの確立した IL に対して，Liliane が再同定を行っている。Il ne sera jamais un homme. では，再同定された IL について，そのアイデンティティを保持しつつ，あらためて分類が行われる。

また，（42），（43），（47）では，「大人の男，一人前の男」という意味で homme が用いられている。「大人の男，一人前の男」というのは対象の性質の記述ではなく，分類であり，無冠詞では用いにくい。ふつうは C'est un homme. のように，主語代名詞には CE が選択される。（42），（43），（47）で IL est un N 型文が許容されるのは，現在とは異なる時空間において，アイデンティティの確立した指示対象 IL が別の分類に属すことを表すからである。

次に，un N が修飾語句をともなう例に注目する。

（48）Au bar de Soleil, nous retrouvâmes Charles Webb et sa femme. Il s'occupait de publicité théâtrale, sa femme de dépenser l'argent qu'il gagnait, cela à une vitesse affolante pour de jeunes hommes. Il était absolument obsédé par la pensée de joindre les deux bouts, il courait sans cesse après l'argent. D'où son côté inquiet, pressé, qui avait quelque chose d'indécent. Il avait été longtemps l'amant

d'Elsa, car *elle n'était pas, malgré sa beauté, une femme particulièrement avide* et sa nonchalance sur ce point lui plaisait.（Sagan, *Bonjour Tristesse,* p. 118）

（48）の主語 elle は Elsa を指し，N は particulièrement avide により修飾される。否定文が用いられていることから，すでにアイデンティティの確立しているエルザが，femme の中でも une femme particulièrement avide というクラスに分類されないことが示される。アイデンティティの確立した指示対象を否定文によって新たなクラスに分類することを拒否する場合にも，IL est un N 型文が容認される。

5.3. 対比の文脈に置かれた場合

IL が他のある要素と対比される文脈に置かれたとき，IL est un N 型文は容認されやすくなるようである。

（49）Ah ! Il est bien plus facile au peuple de démolir des cathédrales et des palais, que de disputer sur la foi justifiante ou sur la présence réelle ! Luther était un disputeur, moi je suis une armée ! *Il était un raisonneur,* moi je suis un système ! Enfin, mes enfants, ce n'était qu'un taquin, moi je suis un Tarquin !（Balzac, *Sur Catherine de Médicis*）

（49）では，il と je が対比の文脈に置かれている。ある要素と対比されることにより，指示対象のアイデンティティがより確立されたものとなる。je との対比によって，IL が分類されるクラスが明確となり，IL est un N 型文が容認される。

（50）— Comment s'appelle la téteuse ? demanda-t-elle ; car c'est une fille, ça.

La mère répondit : Georgette.

— Et l'aîné ? car c'est un homme, ce polisson-là.

— René-Jean.

— Et le cadet ? car lui aussi, *il est un homme,* et joufflu encore !

— Gros-Alain, dit la mère.

— Ils sont gentils, ces petits, dit la vivandière ; çà vous a déjà des airs d'être des personnes.（Hugo, *Quatrevingt-treize*）

（50）でも同様に，René-Jean と Gros-Alain の対比が見られる。Gros-Alain が他の要素と対比されることで，un N への分類が明確になり，IL est un N 型文が用いられる。

お わ り に

Il est un linguiste. のような文は単独では容認されにくいが，スペース導入表現があるときや現在形以外の時制が用いられるとき，属詞 un N の N に修飾語句がつくとき，対比の文脈に置かれたときには，IL est un N 型文が容認されるようになる。

スペース導入表現があるとき，またコピュラ文の時制が半過去形・複合過去形・単純未来形のときに IL est un N 型文が容認されやすいのは，スペース導入表現が導入するスペースや，現在とずれのある時空間において，アイデンティティの確立した指示対象を現在と異なるクラス N に分類しなおすことを表すからである。また，un N に修飾語句がつく場合，アイデンティティの確立した IL をあらためて N の表すクラスに分類することになるため，IL est un N 型文が容認されやすい。IL がある要素と対比される文脈に置かれた場合にも，IL est un N 型文は容認されやすくなる。それは，対比の文脈に置かれることで指示対象のアイデンティティが補強され，N の表すクラスへの分類が強調して示されるからである。

主要参考文献

井元秀剛（1991）「人称代名詞 IL の指示対象－主に CE との対比において－」，『仏語仏文学研究』7, 117-141.

小田涼（1991）「代名詞 CE と IL の指示対象のとらえ方について」，『フランス語学

研究』33, 52-57.
東郷雄二（1988）「« Mon frère, il est linguiste et le coupable, c'est lui. » －代名詞 IL と CE の用法について－」,『フランス語フランス文学研究』53, 102-111.
東郷雄二（1993）「指示と照応－照応的代名詞 IL と CE の用法を中心に－」, 大橋保夫他『フランス語とはどういう言語か』, 駿河台出版社, 75-94.
東郷雄二（2011）『中級フランス語　あらわす文法』, 白水社.
東郷雄二（2015）「コピュラ文の主語代名詞 Il est … / C'est …の使い分けは構文の問題か－西村説への疑問－」,『フランス語学研究』49, 117-124.
長沼圭一（2003）「役割記述機能を持つ無冠詞名詞句について－quand on est femme, on ne dit pas ces choses-là－」,『フランス語フランス文学研究』83, 90-100.
長沼圭一（2010）「フランス語における属詞位置に現れる形容詞付きの無冠詞名詞について」,『愛知県立大学外国語学部紀要　言語・文学編』42, 113-135.
長沼圭一（2012）「フランス語における属詞位置に現れる不定名詞句 UN N について」,『愛知県立大学外国語学部紀要　言語・文学編』44, 131-154.
西村牧夫（2014）「立ち止まって考えるフランス語①, ②, ③」,『ふらんす』4 月号, 5 月号, 6 月号, 白水社.
西村牧夫（2015）「〈ce（c'）＋être＋名詞グループ〉が原則である－東郷氏に答える－」,『フランス語学研究』49, 124-133.
藤田知子（1985）「フランス語の属詞構文について」,『フランス語学研究』19, 80-88.
藤田康子（1992）「« Pour Olivier, elle est un écrivain. »－IL est un N 文が成立する要因について－」,『年報フランス研究』26, 41-53.
Fauconnier, G.（1984）*Espaces mentaux,* Paris, Éditions de Minuit, 坂原茂他訳（1996）『メンタル・スペース－自然言語理解の認知インターフェイス－』, 白水社.
Jeunot, D.（1983）Il est médecin（pourquoi pas ?）, dans S. Fisher & J.-J. Franckel（éds.）, *Linguistique, énonciation. Aspects et détermination,* Paris, Édition de l'EHESS, 81-95.
Riegel, M.（1985）*L'adjectif attribut,* Paris, Presses Universitaires de France.
Tamba-Mecz, I.（1983）Pourquoi dit-on : "ton neveu, Il est orgueilleux" et "ton neveu, C'est un orgueilleux"? *L'Information grammaticale,* 19, 3-10.

――大学院文学研究科博士課程前期課程――